

充実のコース、いよいよ佳境へ
人気の古文書講座で学ぶ
～入門・初級編 第2期開講中～

事業部会が企画・運営している古文書講座が好評です。去る9月には、本年度の第1期シリーズ(入門・初級コース各3回)が終了しました。講義は気鋭の講師陣が担当し、わかりやすい解説とテキストの内容も親しみやすいのが人気の要因のようです。

第1期では、古文書の読み解きを通して、江戸の公家・武家社会や村の仕組みを学ぶことができました。

9月11日の講座(入門コース)で実施したアンケート調査から、受講者の反響をご紹介します。

講義内容については、多数が「興味深かった」と評価していますが、「講義のペースをもう少しゆっくりしてほしい」という意見もありました。

講義時間は、「適当」とする方がほとんどです。意見として、「休憩を入れて、あと1時間長くてもよい」「訳文(解

説文)を準備してほしい」「質問時間をもっと長くしてほしい」——などがありました。

開催日・時間帯では、多くの方が「適当」としています。意見には開催曜日・時間帯への要望もあり、希望日時は実にさまざまでした。

開催日が「館の講座と重ならないようにしてほしい」との指摘もありました。スケジュールの調整は、講師の都合や教室の確保の問題もありますが、これからの課題です。

古文書講座をはじめ、セミナーや見学会などでは、受付を事業部会と総務部会の部員が担当しています。事業活動運営へ、皆さんのより積極的な参加と協力をお願いします。

◆次号「古文書は楽しい」に受講者の寄稿文を特集しました。

10月開講の第2期日程は8頁参照。



ハ・イ・ラ・イト

- 本年も残り少なくなりました。下期活動がはじまっています。引き続き積極的な参加をお願いします。
- 好評の古文書講座、受講者寄稿
- 企画展「本田宗一郎と井深大 展」
9/20 特別内覧会報告、特別寄稿
- 友の会セミナー/見学会報告
・9/27「吉原はこんな所でした」
・10/12見学会「江戸城めぐり(2)」
- えど友プラザ・投稿「私と明治・大正」
- 【新連載】〈コラム〉学芸員エッセー
- 【シリーズ】ミュージアムショップ
名店めぐり(2)「長谷川象牙工芸所」
- 《事業部会だより》
・12/3 第9回セミナー「江戸の流通と湊の情景」申込受付中！
・下期事業計画、決まる
- 会員優待のお知らせ——
・企画展「本田宗一郎と井深大」展
- この会報は、皆さんと一緒に創るコミュニケーション情報誌です。ご意見、ご要望、投稿などをお気軽にお寄せください。

会員継続更新のお知らせ

●手続きはお早めに！

友の会は会員の皆さんで支えられています。会員資格は1年間です。まもなく有効期限を迎える方は更新の手続きをお願いします。

該当の皆さんには「継続手続き書類」が郵送されますので、お早めに手続きをお願いいたします。

* 更新しないと、友の会活動への参加や会員特典を受けられなくなります。ご注意ください。

古文書は楽しむ

古文書が伝える歴史の足跡。時代背景の中に人々の暮らしや社会の営みが見えてきます。

古文書に魅了されて 山口千恵子

「古文書は先人たちが現代に残してくれた歴史のメッセージ」と、教えていただいている先生がいわれます。

しかし、その肉筆の文字が読めず四苦八苦。先人たちによって残された膨大・貴重なメッセージに興味を感じ、古文書を学び始めました。

古文書の難解なイメージとは裏腹に、江戸時代を逞しく生きた人々の町方・地方文書にとくに魅せられました。

江戸博と私の出会いも古文書講座でした。パズルを読み解くような文字の列。まったく読むことができずに、書き込むだけが精一杯だったと記憶しています。紗の薄物をはがすごとく、少しずつ読めた時の嬉しさは格別です。とても奥深く、一度入り込むと魅了されてしまいます。

少し読めるようになった時、こんなことがありました。主人の郷(京都)からの帰り道、滋賀県木之本高月に立寄って数多くの十一面観音を拝観した折、ある堂宇での昼下がり、地元の老人が受付で夢の中！ そっと拝観料を置き拝見しました。

主人と二人だけの小さい堂。文書を声を出して読んでいたところ、ふと後ろに人影が……。

「いい仏様と皆さん言うてくれますが、文書に興味を持たれた方は少ない」と話され、詳しい説明とよく冷えたお茶をいただいて、楽しい旅の思い出になりました。

いま、この春から始まった友の会の古文書講座に参加させていただいて

います。大学院生の3人の先生方とはとても熱心で、真摯に取り組んでいらっしやいます。受講する私たちも欠席する方は少なく、入門・初級コースを楽しく勉強しています。

「継続は力なり」と申しますが、以前に訪れた神社仏閣の文書、句碑を読めたりしますと、思わず心の中でこれからも続けようとする気持ちが高まります。

近ごろは、パソコンで江戸切絵図と現代の地図を重ね合わせ、簡単にタイムスリップができます。古文書の検索をしたり、メッセージを読み解いたり、先人たちは私たちのこんな光景を想像していたでしょうか。

老後は古文書とともに 西 博之

「これからは人生80年、あるいは90年の時代だ。長い老後をどう過ごすか考えておかないと、孤独な老人になるよ」

と、先輩からいわれたのは、50歳代の半ばのことだった。確かに、私の周囲にも高齢で暇を持て余している人が多かった。

私はことし71歳になる。これといった趣味もなく、働き蜂といわれながら夢中で働いてきた昭和一桁生まれは、まことに不器用で、仕事を辞めたら、どうやって余暇を過ごしてよいか分からなかった。

先輩の話聞き、何か適当な趣味を探さなければと思ったが、老後は経済的にもゆとりが無くなるし、体力も気

力も落ちる。若い時から継続している趣味なら、かなりの年齢になっても可能だと思うが、老後新たに始めるにはいろいろと問題もあり、趣味の範囲も限られてくる。何が自分に向いているのかまったく分からず、長年迷っていた。

そんな折、地域の歴史館で北原進先生の古文書講座が開かれた。歴史は若い時から好きだったし、我が家にはわずかだが先祖が残した古文書もあったので、迷わず応募した。北原先生の名講義と古文書の面白さで、10回の講座はあっという間に終了した。私は、長年探し求めた恋人に出会えたような気持ちになり、一も二もなく「老後の趣味は古文書の勉強」と、即座に決めてしまった。

古文書は、解読することも面白いが、古文書を通じて学んだ歴史や昔の文化・習慣などについての知識も面白く、興味は尽きない。

しかも、経済力や体力に応じてさまざまな勉強方法がある。元気なうちは、古文書に関連した名所旧跡を見学したり、歴史館や博物館を訪ねることもできる。高齢になり身体が不自由になったら、自宅や近くの図書館でも勉強できるし、金もあまりかからない。

さらに、共通の趣味で知り合った地域の人たちともすぐ親しくなれる。行動範囲が狭くなった老人には、地域の人たちとの交流がとくに大切である。これからも古文書を通じて、ますます交流の輪を広げたいと思っている。

しかしながら、私自身の古文書解読能力は、素質がないのか、あるいは努力不足か、一向に上達しない。それでも、私はマイペースで、しかも楽しく、古文書を学びながら、充実した老後を過したいと思っている。

【企画展】本田宗一郎と井深大 展

～夢と創造～

「もの」づくり・町工場から世界へ

9月20日(金)午後6時から満員盛況の1階ホールで招待者と合同の特別内覧会が開催されました。

幕があがると、舞台にはロボット君たちが勢ぞろい。テンポの速い音楽のリズムにあわせて、手足の滑らかなダンスに感心して見入っていると、ロボット君は流暢に、「この企画展に皆さんお誘いのうえ多数の方に見ていただきたい……」とあいさつし、意表をつくかたちでセレモニーが始まりました。

竹内館長はあいさつで本展の意義を次のように述べました。

日本全体が元気を失って不透明な現在、ホンダとソニーが東京の焼け跡の

町工場から世界企業に成長を遂げたのは、創業者の本田宗一郎氏と井深大氏の、まさに失敗を恐れない「もの」づくりにありました。「もの」づくりの基盤は江戸時代の多色刷錦絵やカラクリ人形などの技術が、下町の「もの」づくり技術にも受け継がれていて、そのレベルは宇宙ロケットに使われるほど高度なものです。この企画展のコンセプトは、「もの」づくり東京にあります。

展示会場は、第1展示室と第2展示室の2つで、第1展示室は「生い立ちと夢」「創業と発展」「失敗を恐れるな」「夢のつづき」の4章構成です。数多くの展示品や資料が、両氏の業績を理解できる

ように対称展示されています。

自動車、バイク、テレビ、ラジオ、ビデオ、テープレコーダーなど改良・発展させていった製品の数々が時系列に展示されていて、懐かしく楽しいものでした。とくにテープレコーダーからは井深大氏の声が聞こえて、氏がその場にいるような錯覚を起こしました。

第2展示室では、本田宗一郎氏の絵画やゴルフ、井深大氏の幼児教育など、両氏が晩年に関心をもっていた関連の品々も展示されていて最後まで興味が尽きない企画展です。

会場を後に帰途につくと、両氏の大きなバナー(垂れ幕)写真が思い出され、満面豪快に笑っている本田宗一郎氏と静かな思索とやさしさをたたえた井深大氏が、われわれ一人ひとりに「元氣を出せ、夢をもて、失敗を恐れるな」と語りかけてくるような気がして、活気に満ちた明るい心をもらいました。

【取材】広報部会・貝森武夫

◆会員優待は8頁を参照。公式ガイドブックは『本田宗一郎と井深大』です。

《特別寄稿》

車の本場で実力発揮の本田は、今日のイチローらにも共通する。

鈴木 克之(会計)

本田宗一郎の左手のキズは著書『私の手が語る』にある。町工場から世界一をめざし、立ち上げた「もの」づくりの心意気を物語る。

浜松は、家康が生涯の戒めとした三方原合戦完敗の地であるが、遠州からっ風の気性と反骨精神の強い土地柄であり、歴代城主は治政に苦しんだ。成功すれば、禄高倍増となる出世城でもあった。

本田は、浜松北遠の生まれで、幼少時代にT型フォードやアート・スミスの航空ショーで強烈なインパクトを受けた。スピードへの限りなき夢に向かって15歳で上京し、自動車修理工場に就職。技術と自動車レースを体験し、22歳でアート商会 浜松支店を設立した。ART. Automobile Service Stationの看板で、エンジン再生と車体塗装業を開始した。

戦後は「修理屋」「部品屋」から「メーカー」への飛躍の第一歩が、補助エン

ジン付き自転車である。不要となった軍用小型発電機と、燃料タンクとして奥さんの湯タンポを自転車に取り付けたもので、買物用に奥さんが初試乗したが、これが好評でフル操業となった。

発音から「バタバタ」と呼称された。子供の私らは自転車の車輪にゴム風船を付け、三角乗りでバタバタさせながら遊びまわった。

浜松は本田に続く多くのベンチャーが、バイクづくりにチャレンジし、瞬く間にボンボン(オートバイの発音)の町として、オートバイ工業都市となった。

バイクは一人一台。通勤用、配達用として、とくに浜松では人気を博した。そのバックグラウンドは、自然科学的には山坂道路文化圏であり、人文科学的には「もの」づくり文化を構築する「やらまいか精神」の荒い気性にあつたと、60年間、生育した私の見解である。

彼には「試す人となれ」という体験からの語録が多い。

「得手に帆」。すなわち自分の一番得意なことに全精力を打ち込み、人には惜しみなく与え、自分の欠陥は得意な人に助けてもらえる人間関係を築くことが大切であるという。

彼は、99%の失敗の結果、1%の成功があつたという。失敗するからその反省として、新たなアイデアやひらめきが生まれると、失敗することの価値を力説している。

失敗を恐れて何もしないことほど怖いものはない。失敗の悔しさ、辛さを味わって育つ子でありたいと、学校にも期待している。

一方では、同じ失敗をしようものなら「このバカヤローめ、何やってやがる」と、言葉より速く工具が飛んで来たほど、技術に対する真剣勝負の姿勢は、オヤジの凄さとして有名だったようだ。

ワールド・チャンピオンをめざした本田宗一郎は、二輪に続き四輪へ。マン島TTレースに続きF1レースへと、国際舞台の自由競争で勝利した。

江戸開府で家康にお供し、百万都市づくりに貢献した職人が住んだところから、「浜松町」の地名が生まれたと聞くが、この地域は「町工場・ものづくり」の工業地帯として今日まで脈々と続いている。

江戸・東京の歴史に浜松のものづくり精神が、一役加えられていると思うと感慨無量である。



吉原はこんな所でございました

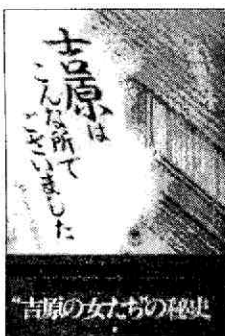
講師 福田利子・清一氏(松葉屋)



松葉屋女将、福田利子氏

本日は母、女将さんも出席しておりますが、代わって私[ご子息の清一氏=写真]が見聞したことや、母の著書『吉原はこんな所でございました』(初版本、昭和61年(1986)、主婦と生活社刊)の内容についてお話をさせていただきます。

文献などには華やかな江戸時代の吉原がよく出てきますが、明治、大正、あるいは昭和の前半の話はなかなか書いたものがなく、約80年間吉原に住んでいる母の著書が案外一つの歴史の証左になるのかなあ、という気がします。



●吉原は江戸文化の発信地

江戸の文化は吉原抜きには語れないといわれます。家康が江戸に来たのが今から410数年前。幕府が成立してから10数年後の元和3年(1617)に公許を得て、現在の日本橋人形町付近に散っていた遊女屋を集めたのが、吉原の始まりです。

次第に人口も増え、江戸城から近かったため、新天地を求めて場所をさがしていましたが、明暦3年(1657)の大火を機に現在の浅草・千束町に移転して、新吉原と呼ばれたのです。このとき、土地面積は旧地より5割増になり、夜間の営業も許されました。

弘化3年(1846)に描かれた「新吉原図」の町並みの骨格は現在も変

わっていません。この絵図に五十間町とあります。距離がちょうど50間(約90m)あったそうで、この脇の門が吉原大門です。廓には「おはぐろどぶ」が四方にめぐらされていました。

吉原は何回か衰退期もありましたが、その都度幕府に岡場所などの取締まりを申し出たり、吉原もまた罪人や悪事についての情報を伝えるという、持ちつ持たれつの関係があったからこそ、公許として260年間続いたのではないかと思います。

歴史上の出来事は、私がお話するよりは石井良助先生の『吉原』(中公新書、1967)に書かれていますので、お読みいただきたいと思います。

●茶屋遊びはステータス

明治維新になるとずいぶん空家が出たようです。これには徳川様にお世話になった江戸っ子として、薩長に使われたくないという意地もあったかと思っています。

赤坂、新橋などの新開地が生まれ、吉原にもいろいろな人が入ってきました。これが活性化になった面もあると思います。洋風建築物が出来、角海老(吉原の大見世の一つ)が3階建ての洋館を造り、邦人以外の花魁(おいらん)が誕生しました。

ただ、年中行事やシステムは江戸時代のを踏襲したため、これが明治、大正の吉原文化が残らなかった一因です。

松葉屋は大正のころから引手茶屋になりました。当時は大見世との付き合いが主でした。ひと部屋の大きさは

4畳半か6畳でした。客はほとんど2、3人連れで、芸者・太鼓持ち(幫間=ほうかん)を呼んで芸を楽しむのですが、半畳ほどの広さでの芸ですから、粋に見えたのかもしれませんが。決して舞台でやる芸ではありません。

ここで遊んでから花魁のいる見世にお連れします。初会、裏(2回目)、馴染み(3回目)といいますが、これも江戸時代のことです。

なぜ茶屋があったのでしょうか。馴染みの花魁が空かない間は、茶屋でしばらく時間をつなぐのが粋な遊びだったのです。茶屋で遊んで、大見世に繰り出すことがステータスになっていたようで、この遊びを通して芸者や太鼓持ちの芸も進歩し、後には茶屋だけで済ませる客も出てきました。

●松葉屋「花魁ショー」の誕生

戦後、松葉屋は昭和23年(1948)に料亭という形で、芸者・太鼓持ちが昔の芸を座敷で見せることになり評判になりました。これには、先代の中村吉右衛門さんが「松葉屋が店をやっているなら」と、歌舞伎座の書割(かきわり)の一つに「松葉屋」と書いてくださったのが大変PRになったのです。

昭和33年(1958)に売春防止法が施行され、吉原の灯は消えました。花魁もいなくなりましたが、これを残せないかと久保田万太郎先生をはじめ皆様のご協力があり「花魁ショー」が昭和34年(1959)に誕生しました。このショーも以後約40年続き、つい最近幕を閉じたわけです。

【記録】広報部会・菅沼和男



江戸東京博物館友の会 見学会(2002/10/12)

江戸城めぐり(第2回)

～内濠の史跡を訪ねて～

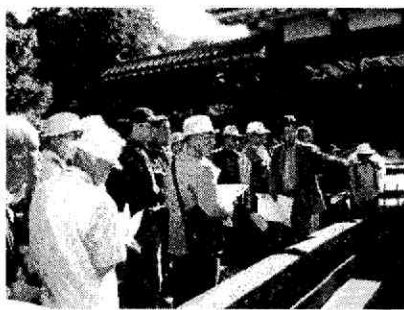
講師 原 史彦(江戸東京博物館学芸員)

10月12日(土)午後1時から、友の会見学会「江戸城めぐり 第2回」が行われました。集合場所の地下鉄東西線竹橋駅前に集った会員は50名。

秋晴れのなか毎日新聞社前をスタートし、清水門→田安門→千鳥ヶ淵土壕→国立近代工芸館→半蔵濠公園→半蔵門→三宅坂→柳の井戸→外桜田門→二重橋→坂下門と、ほぼ江戸城を一周して、午後4時に解散しました。

講師は原史彦学芸員で、詳細なレジュメに加えて、江戸城周辺の絵図と

明治期の景観写真、そして見学ポイントでのユーモアをまじえていねいな解説でわかりやすく、参加者全員が改めて都心の貴重な文化遺産のすばら



原学芸員から史跡の解説を聞く(清水門で)

しさ、広壮さを実感しました。

とりわけ普段の散策では来ることのない清水門(城門の原型が唯一残されている)や北の丸公園の怡和園(いわえん=旧近衛連隊の庭園)跡碑などの新しい発見もあり、二重橋前では橋名の由来(初めは橋脚が二重構造だった)や、その前の広場には大名が年礼で登城のときは家来らが待機していた、との解説もあって、皆さんは「大きな収穫だった」と大満足。「また歩いてみたい」という声が多く聞かれました。

江戸開府400年という節目の年を間近に控えて、近代都市・東京に残された数々の歴史遺産に触れられるのは大きな喜びです。次の町歩きを楽しみにしています。

【取材】広報部会・大松駿一

「ここを歩いてみたい」というご希望がありましたら、候補地を、はがきでお気軽に友の会事務局までお寄せください。



えど友プラザ

友の会会員のページ

●最新情報は、ホームページ「えど友Web」で!

友の会の自主運営です。友の会の最新情報、お知らせ、活動予定や会報(えど友)のバックナンバー(Web版)もご覧になれます。会員のHPもご紹介しします。詳細はHPを参照ください。アドレスは、<http://www.edo-tomo.jp/>

テーマ特集

「私と明治・大正」

其の四

高橋泥舟と現代的意義

上山 英昭

文京区の根津一丁目から言問通りの坂を上り、上野桜木町の交差点を左に曲がると「大雄寺」(台東区谷中6-1-

26)。境内中央に都保存樹木に指定されている大きな楠の木があり、その根元に高橋泥舟(たかはし・でいしゅう)の墓【写真=筆者写す】がある。

泥舟(天保6(1835)～明治36(1903))は幕末・維新期の幕臣。槍術の大家山岡静山の弟で、山岡鉄舟は妹英子の夫である。名は政晃、幼名謙三郎、字は寛猛、通称精一、高橋家を継ぎ、25歳で講武所の槍術師範となり、伊勢守に任じた。槍術の名人だが、書をよくし、

勝海舟、山岡鉄舟とともに「幕末の三舟」として知られている。

佐幕、倒幕で騒然としていた文久2年(1862)12月、幕府は江戸で浪士を徴集し、翌3年2月京都へ送った。泥



江戸博クリップ

未知への体験 ～友の会誕生記～

学芸員 岩城 紀子

2年前の春、異動先の係で振り分けられた担当が、友の会の設立準備でした。博物館の友の会、ああ、あの会費をある程度払うと、会員証がもらえて、入館料が割引になったりするあれね。当時の私の持っているイメージは

その程度のものでした。

しかし、ことは簡単にすまなかった。前任者は、江戸博に自立的な友の会を！と並々ならぬ熱意をもったS学芸員。彼から与えられた課題は、博物館から任意団体として独立した、自ら活動する友の会、という、私にとってはまったく未知数のものでした。

はてさて、そうは言われても、いったいどうやってそんな友の会を作ったらいいものやら……。右も左も分からない状態ではじめて設立準備でしたが、幸い多くの良きアドバイザーに恵まれ、そして、設立の準備委員として、早い段階からお手伝いいただいた方々

に助けられ(この方々のほとんどは今も役員として、会員として、ご尽力いただいています)、なんとか設立にこぎつけることができました。

現在は、博物館側の窓口として、友の会の活動をバックアップすることに日々努めています。といっても、会員の皆さんの熱心さに圧倒され、とまどったりご迷惑をおかけすることがまだまだ多く、「友の会」体験学習は継続中、です。

◆このコラムでは、これから毎号、江戸博の館員・学芸員などの方々からいただいたショートエッセーをご紹介します。お楽しみください。

舟は浪士取り扱いとなったが、尊攘派志士と提携したため任を解かれた。同年12月師範役に復職、慶応3年(1867)遊撃隊頭並となる。

翌4年1月鳥羽伏見の戦のあと、主戦論が強かったなかで、徳川家の恭順を説き、15代将軍の徳川慶喜がその姿勢を示して寛永寺寺院の大慈院に移ったときや水戸に転居したときは遊撃隊を率いて警護にあたった。没年は明治36年(1903)2月、68歳である。

泥舟はこのような人物であったが、幕末期に材をとった作品が多い。子母沢寛の『勝海舟(五)江戸開城』では次のように描かれている。

◇

勝が泥舟の道場にやって来ている。

「あなたの信念の槍を拝見に来やんしたよ」泥舟は一度奥へ引込んで直ぐに仕度して出て来た。立派な紋服であった。

「おい、あちらの隅に土俵を置け」
(中略)

泥舟はぴたりと槍を構えた。土俵との距離は正に二十尺もあろう。ただ静かに自然のままに、その土俵に向って槍をつけている。少しも気張らず、勢い込まず、眼さえも、日頃にまして殊に穏やかに、正に仏眼ともいふべきであろうか。

「ふーむ」。勝は、何かしら自分のからだ、深山の溪流の清水で、洗い浄められて行くような、不思議なすがすがしいものを感じた。

◇

幕府崩壊後も幕臣として節を貫こうとしたゆえに、日の当たる場所に出ることを敢えてしなかった。生活はかなり苦しかったようで、山岡鉄舟がその面倒を見ていたようである。その生き方に共感をもつ人も多く、近年、泥舟がかなり見直されている。

泥舟の名が「狸にはならぬ我身も土の船こぎ出さぬがkachicharaの山」という歌から出ているといわれ、そのとおり、ひそかに人生を閉じた。寺には泥舟の書が多数集められている。

日本工業倶楽部の思い出

野坂 紘子

最近、続けざまに東京駅前の古いビルの取り壊し、建て替えが行われている。銀行協会ビル、丸ビル、日本工業倶楽部ビル……。新しいのと古いのと両

方見られて良いかなと思ひするが、番茶も出端のころの私の勤務先は永楽ビルにあり、本部が工業倶楽部の中にあつたので、次々と姿を消していくのは淋しい。



解体前の日本工業倶楽部ビル
(99/11/3 筆者写す)

初めて工業倶楽部ビルを訪れた時は、古～い、ボロ～い、小さいと思ったのだけれど、まわりのビルが取り壊されて、ページュの建物が忽然と現れたかのように建っていると、こーんな優美なビルだったのかと惚れ直してしまう。

受付では守衛さんが紺の制服で、一段高く座っている。小さなエレベーターはブルーだったかしら。お客様用なので私は乗らないが、わりとゴトゴト田舎の電車風だったような気がする。

書類箱をかかえて駆け上がった階段は、白だかページュだったか、狭いが壁のカーブのゆるやかさが好きだった。エレベーターをゆったり包んでいる

ような、ちょっと穴倉のような静かな雰囲気、よく目のお悪い理事さんが白いシャツに黒の眼鏡でひとり、ゆっくりと壁をつたって降りていらっやつのを思い出す。

大正の建物だが、初めの印象は鹿鳴館！ 薩長土肥！ なにか明治の空気がそこだけ濃厚に残っている所だった。玄関口で渋沢栄一のお孫さんとかいうオジサンにぶつかりそうになったのは、お勤めの最初の日だった。思い出してみると、穏やかで大げさなところがなくて、しっかり守られているような空間だったと思う。

そのオフィスの方は壊されたが、ホテルの部分は残されるとか。年末の文化祭で使ったどっしりしたビロードのカーテンの舞台は残っているのかしら？ 落ち着いた華やかさのあるオレンジ色のシャンデリアの明かりや、超ボロの擦りきれた赤じゅうたん、優しいカーブの階段の木の手すり、あれも残っている

かなあ。

それから工業倶楽部のカレーライスも。こんもりと10センチくらい、丘のご飯が盛りつけてあって、リンゴもおジャガも色んな材料がすべて形のなくなるまでとっぶり煮込んであり、格調と穏やかさと、底の方に華やかさのある味の、薄茶のカレーがすんなりゆったりかけてある。厚いテーブルクロスに重い銀のスプーン、黒いチョッキのボーイさ

んの静かですばやいサービスでいただければ、すごいレトロだが、素適においしいものでした。

白い帽子のコックさんたちが大勢立ち働いていたあの厨房。私も煮込まれそうな大きな鍋やら何やらが、ピッカピカに光っていた。あの日も残っているのかしら。もう40年近くも前のことで、私の記憶も遠い。でも、忘れてしまうのも何かもったいない気がする。

～テーマ特集～「私と明治・大正」 お気軽に投稿ください！

テーマ特集には多くの投稿をいただいています。

募集テーマは「私と明治・大正」。明治・大正期の歴史や文化、くらし、町の話、趣味や関心事、疑問質問など、「あなたと明治・大正」に関連した事柄をご寄稿ください。続編として昭和戦前編も予定しています。

◆テーマ投稿要領

短文(表題も)を、手紙かハガキ、HPからメールで投稿。イラスト・図版や写真も歓迎。採用分には記念品進呈。応募締切:11月末日。会員番号、〒住所、氏名、年齢、電話番号を明記。友の会事務局「投稿」係あて。

江戸東京博物館ミュージアムショップ 名店めぐり〈2〉

伝統の技 「長谷川象牙工芸所」

象牙細工が初めて日本に伝えられたのは奈良時代ですが、盛んになったのは江戸初期のこと。象牙は気品があって耐久性に富み、精密な細工が映えるので、元禄時代を迎えると武士や富裕な町人の間でも人気になりました。

戦前までは根付けや簪(かんざし)、

帯留めなどの装身具から、大きな置物に至るまで好まれた象牙細工ですが、いまでは骨董店や伝統工芸展



繊細な伝統の技で象牙細工を仕上げる。



などで見かけるくらいで、ちょっと寂しい感じでした。

そんな中で、職人氣質を守って象牙細工に取り組んでおられるのは長谷川光照さん(写真)。今回は足立区関原の長谷川象牙工芸所に訪ねました。

光照さんは16歳の時から大阪の象牙細工店で修業し、戦後、父の店を継いだ2代目。当時のきびしかった修業を「食事は付くけど給料無し。あれこれ叱られながら、牛の骨で彫る練習をした」と振り返られます。

生地取り、墨付け、荒彫り、仕上げ、磨

き、毛彫りなどと、象牙細工はとても手の込んだ仕事。このため今は跡を継ぐ人も少なく、象牙彫りの職人は全国で100人足らず、関東近辺でも50人くらいとか。

素材になる象牙は雄象の犬歯で、アフリカのタンザニア、ジンバブエなどから、牙のままの形で輸入されます。現在はワシントン条約で輸入が禁止されていますが、これまでに輸入された象牙を使つての製造・販売は許されています。

象牙細工は美しく見せるために、漂白剤を使っています。古くなると黄ばんでくるのは本来の色に戻るから。なお、仏像などではわざと古びた味を出すため、夜磨(やしや)染めをほどこしてくすんだ茶色に見せる場合もあるそうです。

最近の一番人気は携帯電話のストラップとか。伝統の繊細な技法は、若者たちにも好まれているようです。

江戸東京博物館でも年に何回か長谷川さんの仕事風景が見られます。そんな時に会ったら、ぜひ声をかけてみてください。

【取材】広報部会・岡橋園子

事業部会 だより

申込受付中

友の会セミナー

第9回「江戸の流通と湊の情景」

講師：曲田 浩和(日本福祉大学専任講師)

- ・開催日：12月3日(火) 13:00～15:00
- ・申込締切：11月20日(水)必着
- ・会場：江戸東京博物館・1階会議室
- ・定員：100名(会員本人に限る)
- ・参加費：200円(当日払い)

江戸の流通の事情について、主に水上交通による物流を解説。あわせて、江戸の湊の情景、河岸などについても触れます。

講師略歴：まがりだ・ひろかず

1965年生まれ。江東区文化財係、芭蕉記念館勤務を経て、現在、日本福祉大学(愛知県)の専任講師。専門は流通史。主な著書に『新しい近世史-3 市場と民間社会/巨大市場・江戸の変貌』があります。

講座受講 申込方法

申込方法が
変わりました!

●通常ハガキでお申込ください。返信連絡はいたしません。申込済の方は当日、受付で登録ください。事前申し込みがないと受講できません。必ず申し込みをしてからご参加ください。

▼申込方法:

通常ハガキに《開催日「テーマ名」応募》と、

①会員番号②氏名③〒住所④電話番号を明記。会報、友の会のご感想・ご要望もどうぞ。

・各講座ごと、1人1通。

▼申込先：130-0015東京都墨田区横網1-4-1

江戸東京博物館友の会事務局あて

▼締め切り：各講座案内を参照(必着)

【下期計画】

これからの活動予定です。

*予定は変更になる場合があります。
*詳細はその都度、ご案内などでご確認ください。

◆古文書講座

入門編 第2期 [申込終了]

- 第1回 10/16(水) 14:00-16:00
- 第2回 11/20(水) 10:00-12:00
- 第3回 12/4(水) 14:00-16:00
- ・会場 江戸博 1階会議室
- ・講師 小宮山敏和

◆古文書講座

初級編 第2期 [申込終了]

- 第1回 10/30(水) 14:00-16:00
- 第2回 11/20(水) 14:00-16:00
- 第3回 12/18(水) 14:00-16:00
- ・会場 江戸博 1階会議室
- ・講師 野尻泰弘

◆友の会セミナー

- ・第10回「光の芸術 江戸切子」
1/21(火) 18:00-19:30

講師：須田秀石

- ・第11回「明治時代の女子学生
～大山捨松を中心として～」
3/27(木) 18:00-19:30

講師：久野明子

◆創作講座

- ・「江戸手描友禅」
3/21(金) 午前・午後 各1回

講師：佐藤平八工房

会員優待のお知らせ

【企画展】開館10周年記念

本田宗一郎と井深大 展

～夢と創造～ 「もの」づくり・町工場から世界へ

好評開催中! 12月8日(日)まで

月曜休館(9/23、10/14、11/4は開館、翌日休館)

- 会員：一般600円、65歳以上300円、大専門生480円
- 同行者：一般960円、65歳以上480円、大専門生760円
- ◆ガイドブック『本田宗一郎と井深大』朝日新聞社発行
会員10%割引1,323円(定価1,470円)税込。会員証提示

《次回企画展 予告》

江戸開府400年記念・開館10周年記念企画展
「大江戸八百八町 展」 2003/1/5(日)～2/23(日)

活動に参加しよう 各部会員を募集!

事業部会：事業の企画・運営、広報部会：〈えど友〉の編集・PR活動、総務部会：各種案内の発送・受付
ハガキに、希望部会名、会員番号、〒住所、氏名、電話、応募事由、を記載して、事務局までご応募ください。



次号は新年号1月1日発行予定です。
<http://www.edo-tomo.jp/>

江戸東京博物館友の会
会報〈えど友〉第10号

発行日 平成14年(2002)11月1日
発行 江戸東京博物館友の会事務局
130-0015 東京都墨田区横網1-4-1
Tel. 03-3626-9910

編集・制作 友の会広報部会
発行・編集人／佐山彪(事務局長) 編集主幹／大松駿一
編集／岡橋園子、菅沼和男、佐藤幸彦、貝森武夫、
上山英昭、野坂結子 レイアウト／巻淵彰